

鈴木有郷牧師 説教

5/17/09 「我らと共にいます神」 詩篇 139:7-10

私たち人間は自分が価値のある存在だと確信できなくなる時、生きる勇気を喪失し、人生の方向性を見失い、極端な場合は自殺に追い込まれます。

人間の価値はどこにあるのでしょうか。

私は母が亡くなる前の4、5年の間この問いと 悪戦苦闘しました。私の母は80才の半ばを境に心身共に衰えが目立つようになりました。晩年は私たち夫婦の顔も、孫の顔も、何度も見舞ってくれた甥の顔も分からなくなりました。この世的な見方からすれば、母の存在価値はゼロに近いものとなりました。寝たきりとなり、全く無力と化した私の母に人間としての価値はあるのだろうか。私を悩ませたのはこの問いでありました。

哲学的答えは何の助けにもなりませんでした。哲学によれば、人間の価値は理性の行使にあります。しかし母は理性からほど遠い存在となっていました。倫理的答えも助けになりませんでした。倫理学は人間の価値を善悪の判断に置きます。しかし母は判断能力を失っていました。科学的答えも助けになりませんでした。科学は人間の価値を言語能力に置きます。しかし晩年の母は一言も言葉を発することができなかつたのです。哲学も、倫理学も、科学も人間の根本的価値について満足いく解答を与えてくれませんでした。

このコンテキストにおいて聖書と向き合った時、新しい発見がありました。例えば詩編の139編に次のような言葉があります。「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れれば御顔を避けることができよう。天に上ろうとも、あなたはそこにいまし、よみに身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行きつこうともあなたはそこにいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる。」

いかなる状態に置かれようとも、神は私達を忘れることはない、と言うのです。天から常に私達に声をかけて下さるというのです。人間の価値は、神に愛されているというところにあると言うのです。

しかしこの詩編の言葉にも、私は何か物足りないものを感じていました。確かにあの詩編の詩人が言うように、一人一人の人間は天にいます神によって 限りなく貴重で、限りなく重い一個の人格的存在として見なされているという信仰は私に慰めを与えてくれました。

しかし、所詮その神は遠い所から頑張れ頑張れと声をかけてくださる神です。私の心の中にあつた問い、それは高き所にいます神は低き所にいる母の身体をなぜくださるのか、彼女を懐の中に抱き入れ、苦しみを共にしておられるのか、という問いでした。この問いに対して詩編が指し示す神は十分な答えを出していないように私には思えたのです。

私を心底から勇気づけ、まったく無力と化した母と毎日人間として向きあふことを得させてくれたもの、それは、主イエスは人間の苦しみを自らのものとして負い給い、今も私たちと共に苦しんでおられるというキリストの福音でした。

神は高き所にいますだけではない。神は低き所にこそいまし給う。神は徹底的に無力と化した母を支え、抱き抱えて離さない永遠なる同伴者だという信仰であります。主イエスは私たち人間の価値の究極的基盤なのです。神は高き所にいますだけでなく、この世の命幾ばくも無い、完全に無力と化した一人の老人と共におられるというキリスト教の信仰が私の櫓(やぐら)でした。砦の塔でありました。嵐の中の錨でした。

私たちの人間としての価値は、人間が考えた価値観によって決まるものではありません。私たちの人間としての価値は、永遠なる同伴者としての主イエスの愛と慈しみの眼差しの中に置かれているというその一事にかかっているのです。低き所にいます神こそ私たちの希望と力の源であります。

これ以上の恵み、これ以上の慈しみ、これ以上の喜びを想像することができるでしょうか。